

「中等国語（4）」（昭二二）漢文篇目次の成立過程

——新制中学初の編纂意図の方向を探って——

石 毛 慎 一

一 はじめに

昭和三二年度用新制中学国語教科書の漢文篇は、漢文科の果たした国民思想形成上の問題から存廃が紛糾し、二三年八月になつてようやく発行されたが、どのような過程を経て決定稿に至つたのかは今なお闇の部分が多い。本論は、直接編纂に携わつた原田親貞氏が財団法人教科書研究センターに寄贈した当時の資料と同氏へのインタビューをもとに、目次の成立過程とその方向を明らかにしようとするものである。資料とは三二年度版「中等国語二、三」（4）の漢文篇の草稿とそれに付随する文書であり、原田氏の所属した編纂委員会が所有していたものである。

新制中学最初の漢文篇編纂委員会がどのような教材をどう組み立てようとしていたかを調査するには、編纂委員会が戦前の教材をどのように評価したのか、CIEが漢文をどう見ていたのか、

そして、文部省がCIEと漢文存続を望む団体との間でいかなる方向を目指そうとしたのかを知ることが不可欠の前提となる。従来は、目次の決定稿しか研究対象がない状況下において、編纂委員会の方針とCIEの意向との区分がとかく曖昧であつた。先行研究には吉田裕久「『中等国語』（1947）の研究」があるが、目次の成立に到る過程については述べておらず、特に、漢文篇の目次の成立過程には全く触れていない。

二 漢文篇の存廃をめぐる事情

昭和二〇年一月からCIEのホールが漢字を廃止し、国字のローマ字化を迫ろうとして、日本側を慌てさせたが、国語国字問題が日本政府の判断に委ねられたのは、翌二一年五月のホール解任のときであつた。国字問題の余波を受けて中学校用の漢文は不要との雰囲気編纂委員の間にもあつた。二二年度「中等国語」

の発行が決定し、二二年春頃「委員会」は招集された。⁽⁶⁾委員長は竹田復（文理大）、委員に文部省から麓保孝、山田厚、学界から長澤規矩也、内田泉之助、清田清（漢文教育懇話会）、舞田正達（同）らがあり、のち山田厚の後任に大塚伴鹿、原田親貞が加わった。

発足当初、CIEは連合国へ責任を追うという立場から、教科目においてまずアメリカの教育にないものは否定し、次いで、理解できないものを否定するという方針を取った。即ち、義務教育の中学生に古典は不要、ましてや漢文は不要との判断が先にあった。この前提の上に文部省内の古典不要論者が乗った。「石森編修官の世となり、国語の教科書の内容も根本的に改められ、非常にやさしくなってしまった。古典を持たぬアメリカの当局の話をそのまま受入れて、先方の例示のやうに、現代語中心とし、長篇を入れるに至り、漢文の教科書も自然と圧迫を受け、文部省当局は、何でもかんでも、進駐軍当局の意志と称して我々に迫った。」と長澤規矩也が記すのは、原田氏の話と一致する。かううじて、「漢文の内容をもった教科書を別冊にすること」が認められたが、「漢文篇」「乙種」などの名称は使えず、原文使用も一切禁止という厳しい条件下でのスタートであった。原田氏は「天」という漢字一字が当初CIEに全面削除せられたと繰り返し説明する。「天」が日本思想としての天皇や神に通じるというのが理由であった。

一方、漢文存続を要求する側の動きはどうであったのか。二二年七月一日、大東文化学院と二松学舎主催のもとに漢文教育協

議会が開かれ、席上、漢文教育を担う漢文関係教員を中心とした団体の結成が決まり、七月三日、第一回準備委員会が開催された。それにより漢文教育懇話会が結成され、文部省への提出決議案と清田清、龍澤良芳、福島正義、舞田正達四氏の実行委員を決めた。翌日、実行委員四氏が文部省有光次郎教科書局長を訪ね、前日の決議を提示した。その結果、現場の声を無視するなどという懇請が通り、八月八日から清田清、舞田正達の両氏が教科書編纂委員として加わることになった。九月七日に全国総会を開き、そこで会則の承認や経過報告がなされた後、竹田復（文理大）が教科書編纂委員長の立場から編纂の趣意説明をし、松本洪（無窮会）が漢字制限反対を述べ、さらに塩谷温（斯文会）、上野賢知（無窮会）、山田厚（文部省教科書局監修官）、文部省国語調査室の一名（名前不詳）らの関係各界の主立った人も交えて討議した。九月三〇日、「文部省内に中等学校漢文科廃止に関する議起ると聞き、急遽世話人会を開き、之が対策を議」したが、「後に必ずしも然らざること判明」したとあり、懇話会側は、漢文存廢の報に一喜一憂する緊迫した空気に包まれていたようである。数日後、鈴木虎雄、倉石武四郎、吉川幸次郎、平岡武夫、木村英一らに連絡、打ち合わせを行った後、一〇月六日に、漢文学界代表者と漢文科存廢問題を討議、結局、漢文教育懇話会に運動一任が決定された。以後、懇話会は、中学校における漢文の必要論を繰り返し討議し、文部省に提示するところとなる。因みに、懇話会の本部は都立八中に置かれた。

ところで、漢文教育懇話会設立の趣旨を確認しておく、冒頭

で「我が中等学校漢文科に關しても徹底的な反省が行はれなければならぬ」とし、結びにも従来のあり方を「冷厳に検討」し、「将来の漢文教育のあり方を明確に把握」と強調されているが、「反省」の具体的内容は明示されていない。漢文存続の目標を「東洋文化の理解のため」に置き、漢文の学習が「敗戦日本人の自己反省の鏡であり、同時に又世界人的教養への足場で」あるだけでなく、「東洋平和」のためには「隣那中国との真の融和提携」が「前提的条件」であるとして、それが「祖国再建の成否に連る」というのである。この理由設定は、漢文教科書編纂委員会が作成した目次草稿にある三つの「目的」、すなわち「東洋古典の教養」「東洋文化の理解」「現代中国の認識」と一致しており、懇話会の意向と符合する。遡つて、漢文が中国との良好な關係に資するとする捉え方は戦前からあり、一二年には「儒教の我が国民精神に及ぼした効果、漢文の我が国語に与へた影響について公正な認識を持し」と儒教の影響を明文化し、「実用二適スル各種ノ文」として従来の文学的に偏した内容を口語文、叙事文からも取り上げるように指示しているのである。つまり、終戦直後に用語が「融和提携」「東洋平和」と変わっても、中等漢文の目標に中国との良好な關係作りを置く考え方は、戦前期から引き継がれているのである。そして、この考え方は、二三年からの高校用漢文教科書「漢文」の「序説」の「一、東洋文化の淵源を知るために二、漢民族を正しく理解するために三、中華民国を認識するために四、わが過去の文化を知るために」という四つの目的のうち最初の三つが日本以外を対象としている点にみごとに表れ

ている。

文部省の漢文教科書編纂委員会がCIEと漢文教育懇話会とのはざ間に立たされるなか、CIEも漢文に対する態度に徐々に軟化を見せた。通訳が東洋学の岩村忍に交替となった以降のことである。CIEのハークネスは数学教師出身であり、漢文を全く理解しておらず、「古代ギリシヤ語やラテン語と同じく見ていた」¹³⁾が、岩村忍が長澤規矩也に伴なつて幾度もハークネスのもとに向き、漢文がギリシヤ語やラテン語の位置とは異なり、現代語にも組み込まれていることを力説したことによつて、次第に日本文化に占める漢文の位置を理解し、漢文について当初ほどの注文は出さなくなったのである。

三 目次草稿の成立順序

漢文篇の目次が決定されるまでには、名称、教材、配列等の多くの紆余曲折があり、少なくとも十数回にわたる草稿の見直しがあった。草稿等には時期を記す記載が一切ないが、時系列に並べるに際して修正の具合や書き込みを参考にすれば、かなりの程度は推論が可能となる。そこで、一枚の文書の中に中二用と中三用が揃っているものをA稿、B稿、C稿、G稿と名付け、これら七稿の成立順を見ていく。

まず、名称について。名称を全体と学年とに分けると、A稿では「中等漢文入門」となっている。「中等漢文入門」はD稿まで続き、E稿からG稿までが「中等国語乙種」となっている。つまり、全体の名称は「中等漢文入門」→「中等国語乙種」→現存の

「中等国語（4）」という変遷をたどった。学年の名称については、A稿が「前篇（第一学年用）」「後篇（第二学年用）」となっており、当初一学年と二学年に漢文を配当する予定だったことが窺われる。B稿からF稿までは学年の名称が「前篇」「後篇」の呼び方だけとなった。E稿にあった「小話」の「笑はぬ妃」「長い竿」の二教材が、F稿ではその上から二重線が引かれて「秋風五丈原」と訂正され、G稿では、「秋風五丈原」に直されている。従って、E↓F↓Gの順序であつたと思われる。G稿から「中等国語乙種」の「巻二」「巻二」となった。つまり、学年の名称が「前篇（第一学年用）」「後篇（第二学年用）」↓「前篇」「後篇」↓「巻二」「巻二」↓「二」「三」という変遷を辿つたから、A、B、C、Dの四つの草稿は、E、F、Gの三つの草稿より以前のものであり、前者四稿の中でもA稿が「第一学年用」「第二学年用」と入っているのが最古であるとの予想が立つ。さらに、E稿にある「面子」「漁夫の利」「鶏鳴狗盗」「朝三暮四」がD稿にもあり、G稿にないことを見ると、E稿がG稿より以前であることが予想できる。B、C、Dの三稿については、C、D二稿がB稿の上にペン書きで修正が加えられているので、三者の中ではB稿が古く、また、C稿では「前篇」「後篇」ともに入っている「孔子の言葉一、二」「孟子一、二」がD稿に「孔子の言葉」として「前篇」に一本化され、「孟子の話」として「後篇」にまとめられているので、C稿の方がD稿より古いと考えられる。以上から、成立はA↓B↓C↓D↓E↓F↓Gの順と仮定することができる。次節ではこの順序に従って考察を加えるが、矛盾がないならばこ

の順序が傍証されたとと言える。

四 決定稿から見た教材の採否

教科書研究センターに保管されている目次草稿に通し番号を付けると、①次稿から14次稿までとなる。○で囲んだ数字は二学年用と三学年用の両方が載っているものであり、全部で七稿ある。前節においてA↖G稿と仮称した草稿はそれぞれ①、②、③、⑤、⑥、⑧、⑫に相当するので、ここからは①↖⑫次稿と呼ぶことにする。草稿の成立順序は次の表の通りと推測した。

通し番号	①	②	③	4	⑤	⑥	7	⑧	9	10	11	⑫	13	14
2学年用	1	2	3	4	5	6	7	8	9		11	⑫	13	14
3学年用	1	2	3		5	6	7	8		10		12	13	14

空欄は、当該学年の草稿がないことを示す。以後はこの通し番号を用いる。この表をもとにして、決定稿に残った教材、消えた教材という二つの視点から採否状況を探ることにする。

（一）決定稿に残った教材

漢文篇の編纂は「初級用『中等国語』乙種編纂の要項⁽¹⁶⁾」によれば、前述した三つの目的と六つの方針のもとに進められた。即ち、東洋古典の教養、東洋文化の理解、現代中国の認識という目的と、實際教育家の意見の尊重、生徒の興味の尊重、漢文の国語化、文字文章の平易、別冊という体裁、新制中学二学年と三学年への課業という方針である。この「要項」は方針のなかで「尊重した」

「国語化した」「別冊にした」などのように過去形で記されているので、かなり進捗してからのものであることが察せられるが、編纂の方針を明示した唯一の資料であるので、以後、これを中心にして教材選択がどう行われたのかを見る。

①次稿「前篇」にある「孔子の言葉」は、原稿の内容が差し換えられて決定稿「孔子とすることば」に残った。「神話と伝説」も題名だけは残ったが、内容は一変している。当初は魯迅のものから引用する予定だったようである。①次稿から決定稿に残ったのは、教材のタイトルではこの二つ、内容面からすればゼロである。

②次稿からは、漢詩の「春暁」(孟浩然)、「山行」(杜牧)、「秋思」(張籍)、「静夜思」(李白)、「董大に別る」(高適)、「山亭夏日」(高駢)、「憫農」(李紳)、「遊子吟」(孟郊)、「京師得家書」(袁凱)、「尋胡隱君」(高啓)、「蚕婦」(無名氏)計十首が残った。「江南の春」(杜牧)は「詩五首」から「南船北馬」に章段を移して収められた。散文では、「孔子の言葉」(後篇)の一部、ケー・クロー著「底知れぬ忍耐」(前篇)がある。「孟子の主張」(前篇)の前書きにあたる「孟母」は、李瀚「蒙求」からの書き下しを載せる。「小話四題」は教材名も四つのストーリーもそのまま残しているが、原稿は坂井徳三「支那イソップ物語」の書き下し文であるので、のち口語文に直された。「倭漢朗詠」(後篇)は、慶滋保胤、都良香、白樂天、元稹を載せる。

③次稿は②次稿と同じ教材のものが大半である。「楓橋夜泊」(張繼)、「磧中の作」(岑參)、「春夜」(蘇軾)、「海に泛ぶ」(王守

仁)、「春望」(杜甫)の五首が三学年用に残った。同様に、「古都三景」「双十節の由来」「鵬の話」「莊子と列子」(三)の一部として決定稿に残った。「倭漢朗詠」と「和漢朗詠」との書名については、概ね前半が「倭」の表記で、後半が「和」と記されている。③次稿の目次では「倭」であるが、「各課内容」や「教材配当表」では「和」となっており、同一次稿と思われるにも拘わらず、表記上統一されていないのは疑問が残る。「和」の表記は⑥次稿からであり、⑥次稿以後はすべて「和漢朗詠」に統一されている。

以下、4次稿では、後篇の目次が一部しか残存しておらず、また、残存部分もメモ程度の書き方をしており、⑤次稿との順序の入れ替えの可能性もある。⑤次稿では、「南船北馬」が決定稿に残っている。「南船北馬」の教材名は、⑤次稿において「第一課 中華民国の風土」の横にメモ書きが加えられており、⑤次稿以後、内容とともに「南船北馬」に差し替えられている。「漢字の由来」は教材名が「漢字の話」に修正されるとともに、「平易にする」とメモが書き添えられているので、この時点で平易に書き直された。⑤次稿「孔子」の語句が⑥次稿から平易になって「孔子と子路」に改められた。⑥次稿ではじめて出た「蜚雪の功」も最後まで残った。7次稿の「小話」が⑧次稿の「秋風五丈原」と差し替えられ、9次稿では「闕題」(杜甫)の代わりに「絶句」(杜甫)が、⑫次稿の「神話と伝説」(卷一)が「上元節」に差し替えられて残った。また、「日本の漢学」と「李白と杜甫」が新たに加わり、前者は「日本における漢文漢学」と改題

し、最後まで残った。日本の漢学についての教材はこれまでなかったものであり、「李白と杜甫」はそれまでの「陶淵明」に代わるものである。

漢詩は二十首あるが、そのうちの三分の一程度は当初から決定されている。人口に膾炙している点と文学性に富んでいる点が差し替える必要にしたのであろう。「和漢朗詠集」についても同様である。③次稿の「教材配当表」の目的である「東洋古典の教養」に「文学的なもの」があり、ここに詩二十首と「和漢朗詠」の二つが記入されている点にも、その編集意図が確かめられる。

ケー・クロウの「たゆまざる努力」(当初は「底知れぬ忍耐」と題される)も早くからあった。近現代の中国について日本人以外の人物、特に西欧人が著したものを入れようとする方針は、当初からあった。連合国側に属する国の著作であるならば、CIEを通過することも容易だとする実意的意図もあったからである。

『孟子』『論語』が多く採られていることも特徴と言える。二三年度版の新制高等学校用「漢文」や一八年度版の「中等漢文」、二一年度版の暫定教科書などと比較すると、論孟の減少は僅かであり、儒教經典を排斥しようとの動きは見られない。二一、二二年当時は、教育勅語の存続の声が政府内にも強かったことや、中国が連合国側に属していたことを勘案すれば、『論語』『孟子』が超国家主義的日本思想を担っていたとの認識は取れなかったのである。

(2) 決定稿で消えた教材

次いで、草稿段階には存在したが決定稿で消滅した教材には、どのようなものがあつたのかを見る。まず、①次稿から消えたも

のは多くあり、「中国の自然と人」、漢詩の「鸛鵲樓に登る」(王之涣、「早に白帝城を発す」(李白)、「黃鶴樓に孟浩然が広陵に之くを送る」(李白)、「白楽天が江州の司馬に左降せらるるを聞く」(元稹)、「長安主人の壁に題す」(張謂)、「礼楽」(中澤道二)、「人の道」(貝原篤信)、「張良下邳に遊ぶ」(司馬遷)、「勸学」(室直清)、「読書以何爲要」(伊藤維楨)、「読書亦心学」(佐藤坦)、「書不可妄説」(佐藤坦)、「読書須熟誦」(佐久間啓)、「読書勿諉記性不好」(買書勿吝) (二教材とも張之洞)、「笑林」(神話と伝説)(魯迅)、「周代封建の制」(蘇張・縦横の謀)「秦の滅亡」(文書の沿革)「漢武の崇儒」(古代中国の世態)「東漢清名の士」(「日唐の通交」)「道佛の興隆」(以上九教材はいずれも那珂通世)、「幻談」の「宗定伯売鬼」と「燕丹通秦」と「周武視死人録」の三教材、「故事雜抄」、「文苑」である。①次稿の「後篇」の教材はすべて消えた。室直清、佐藤坦、貝原篤信など日本の儒学者によるものも①次稿では多いが、草稿が進むにつれて減少した。決定稿では「日本における漢文漢学」(「和漢朗詠」の二つになったことを慮ると、編纂当初には日本漢文削除の意思がなかったことを示す。つまり、日本漢文削除はCIEの意向ではなく、日本側の判断であるとの拙論をこゝでも裏付けていることになる。)

②次稿で現れてから消えたものは、「中華民國の風土」、「孔子」(那珂通世)、「漢学の歴史」(川田鉄弥)、「中江藤樹」(原善)、「漢民族の社会」(松井等)、「面子」(ケー・クロウ)、「故事成語」(漁夫の利・牛耳を執る・五十歩百歩・背水の陣・傍若無人・青藍・破竹の勢・矛盾)、「隨筆二題」(「人之道」(大学)、「十

目一行、「書を読まざるは是れ面牆の士」、「詩人と自然」、「故事成語（髀肉之嘆・病人膏肓・登竜門・月旦・推敵）」、「雜記（祝允明・顧炎武）」、「梁上の君子」、「愛人」（杜亜泉）、「為学一首示子姪」③次稿では「聡敏不可恃」と改題（彭端淑）である。③次稿の「朱子と王陽明」が一旦は選定された理由に「支那近世の偉大な哲学者であり、且つわが国の中世以降の学問に大きな影響を与へた朱子と王陽明の伝記で、人格の完成に役立たせようとした」（各課内容より）とあったが、「とにかく易しく、親しみやすいものを第一にした」（原田氏）という基準によって外された。以下、4次稿で現れてから消えたものは、「上元節」⑤次稿以降では「燈節」と改題、⑥次稿では、「小話二題」の「笑はぬ妃」「長い竿」と「盧生の夢」、⑥次稿では、「鶏鳴狗盜」「朝三暮四」「五色の石」「蚕の話」、「泰山府君」、9次稿では、「小話五題」の「化物の絵」、故事成語の「株守」「井中の蛙」（いずれも「支那イソップ物語」から）がある。10次稿の「蘇東坡」と「国民党々歌」「三民主義」「中国の命運」は突如持ち上がるが、すぐ消える。

注目すべきは、すぐ消えた教材の中に「現代小説」（魯迅の短編）とあることである。この短編が何を指しているかは、もう一つ別の草稿（何次のものか特定できない）の中に、『ふるさと』（魯迅、呐喊）とあることによって判明する。魯迅の「故郷」が戦前の漢文教科書に採用された形跡はないので、この昭和二三年度用「中等国語」が初出であったことを示す。ケー・クローと同様、連合国に属する中華人民共和国の近代作家を一人入れ

ようとの配慮があったと見られる。

儒教経典たる『大学』『中庸』が消えたことも特筆すべきであろう。当初の段階では「前篇」の結びに「人之道」と題して「天学」を、「後篇」の結びに「中庸」を据えていたのであるが、それらが共に早い段階から消えた。内容も難解で、『論語』『孟子』を読んだ後が順当であることから、「中等国語」の趣旨にそぐわないとの判断があったことは間違いない。また、「西洋に伝つた論語」（のち、「論語の西方流伝」と改題）の消えたことと、決定稿に『莊子』『列子』『墨子』などが入ってきたことを合わせると、中国思想が儒教に偏るとの判断があったものと思われる。日本の儒学者、漢学者のものが消えたのも、思想教材のバランスがあらう。③次稿の「教材配当表」にある「生徒の興味・関心」という観点や平易なものという方針だけは考えにくい。孝行の代表教材「中江藤樹」（原善）さえ消えたことでも示唆されるように、日本漢文が戦前の軍国主義的思想を築いたバックボーンであるとの認識も強まったと見るのが妥当であろう。

決定稿の直前まで存在した故事成語が、一挙に消えたことも注目に値する。「漁夫の利」「鶏鳴狗盜」「朝三暮四」「五十歩百歩」「牛耳を執る」「背水の陣」「傍若無人」「破竹の勢い」「矛盾」「青藍」「髀肉の嘆」「病膏肓に入る」「登竜門」「月旦」「推敵」のすべてが決定稿の段階で消えたのであるが、その理由については不明である。中国人による近代の作家の散文、即ち杜亜泉「愛人」、彭端淑「聡敏不可恃」、祝允明・顧炎武「雜記」、「隨筆二題」（『魚目集』）なども消えた。理由は同じく不明である。中学生に

内容が高度だという理由だけであろうか。

五 おわりに

近代から現代への接続関係を見るに当たって、戦後初の中学国語教科書漢文篇の編纂がどのようなスタンスから出発したのかを探ることは不可欠の必要条件となる。臣民教育という大前提こそ取り払われたが、漢文の目的を戦前と同じに構えたことは、委員会の根本的なスタンスを示唆していると言える。儒教儒学教材や日本漢文を多く残そうとした意思も同様である。一方、変わったのは、生徒のアンケートや実教育家の意見を尊重する手法や、教材の平易化、漢文の国語化の方針であったが、生徒の希望アンケートについては、実施校が関東を中心とした八中学のみであり、また、日本漢文の希望が文学教材より多く最多（五一・二％）であるにも拘わらず削除の方向となったことを考えると、生徒の希望に添った選択という委員会のコメントを鵜呑みにはできない¹⁸。さらに、当初日本漢文を多く採用し途中から削除の方向に変わったことから推察できるように、戦前の教材の反省・分析が十分なされた形跡もない。

ただ明確なことは、時間的制約の中で編纂委員会が十数回にわたる草稿を検討していたことは、中学漢文を是非とも存続させたかったという意思の具現と言えることである。思想教材より文学教材を、難解な内容より平易なものを、原文より国語文で、という姿勢もこうした意思の表れである。もしこの時点で、廃止論者に同調していたとしたら、もしCIEの当初の意向に添っていた

としたり、この二年度用はもちろん、翌三年度からの新制高等学校用の漢文教科書も有り得なかったに違いないのである。

注

- (1) 原田親貞氏は、昭和二年五月から中等教科書国語科編纂委員として漢文教科書編纂に携わり、一〇月文部省に入省、中等漢文教科書編纂に就く。後、検定調査委員として五年三月まで在任した。
- (2) 筆者が平成二年夏、当該センターの特別研究員である中村紀久二氏とともに整理した資料を指す。
- (3) インタビューは、昭和二年当時に文部省教科書局の職員だった原田親貞氏に対して行ったものであり、平成一〇年八月と平成二二年八月一二日の二回、原田氏宅にて行ったものである。
- (4) 『広島大学教育学部紀要』(第2部、第38号、一九九〇・二)
- (5) 『戦後国語改革通史』(明星大学戦後教育史研究センター編、明星大学出版部、平成五・一〇、二八八―二九六頁)
- (6) 長澤規矩也『国語学習中の漢文学習指導』(学友社、昭和二五・九、『長澤規矩也著作集』第八巻所収、汲古書院、三九八頁)
- (7) 同前掲書(三九八頁)
- (8) 山田厚は、CIEおよび文部省教科書局の一部の漢文無用論者としてこの漢文教育懇話会の間で神経を磨耗し、自らの命を絶ったそうである。一部の無用論者とは、石森延男を中心として小山定良、篠原利逸らであり、小学校教員経験の長い人達が多かったそうである。編纂委員会の席上、長澤規矩也が漢文無用論、古典縮小を唱える石森延男を「何回か面罵した」(原田氏)そうである。また、漢文教育懇話会が文部省に陳情する様子は「日参と言ってもいいほどの印象」だったという。
- (9) 『会報』(第一号、漢文教育懇話会、昭和二・一〇・二七)

(10) 同前掲会報

(11) この段落の「」はすべて前掲「会報」から抜粋した。

(12) 「中等学校改正教授要目の趣旨」(昭和一二・五)

(13) 同前掲書(四〇頁)

(14) 原田氏は、岩村忍の尽力がなければ中等教育の漢文は消えていたかも知れないと、一切無報酬で尽力した氏の功績を称える。

(15) サンプルとして、A稿をできるだけ実際に近い形で載せる。様式はB
4縦書きで、上段に第一学年、下段に第二学年を配列する。B稿以降もこのスタイルで記されている。

中等漢文入門

前篇(第一学年用)

第一課 中国の自然と人

第二課 中国の詩

鸛鶴樓に登る(王子漢)

早に白帝城を発す(李白)

黃鶴樓に孟浩然の広陵に

之くを送る(李白)

白樂天が江州の司馬に左降

せらるるを聞く(元稹)

長安主人の壁に題す(張謂)

第二課 孔子の言葉

第四課 礼楽(中澤道二)

第五課 人の道(貝原篤信)

第六課 古代中国の世態

(那珂通世)

名・字・姓氏及び世族

目次

後篇(第二学年用)

第一課 勸学(室直清)

孫康映雪

車胤聚萤

第二課 讀書

讀書以何為要(伊藤維楨)

讀書亦心学(佐藤坦)

書不可妄説(佐藤坦)

讀書須熟讀(佐久間啓)

讀書勿説記性不好(張之洞)

買書勿吝(張之洞)

第三課 文書の沿革(那珂通世)

第四課 笑林

第五課 漢武の崇儒(那珂通世)

東漢清名の士(那珂通世)

第六課 日唐の通交(那珂通世)

嫁娶の制 第七課 道佛の興隆(那珂通世)

第八課 神話と伝説(魯迅)

第九課 周代封建の制(那珂通世)

第十課 蘇張縦横の謀(那珂通世)

秦の滅亡(那珂通世)

張良遊下邳(司馬遷)

第九課 故事雜抄

第十課 文苑

(16) 教科書研究センター所蔵資料(Y11・2・1)

(17) 「終戦前後における中等漢文教材の変遷に関する基礎的研究

——旧制中学・暫定・新制中学及び新制高校三者の比較——」(中等教育

史研究)八号、中等教育史研究会、二〇〇〇・四

(18) アンケートの項目は、日本漢文、中国人の漢文、現代文(時文、白話文、文学的なもの、哲学的なもの、宗教的なもの、道德的なもの、科学的なもの、社会的なもの、伝記言行逸話、歴史地理、その他の十二項目である。

(19) 筆者は、平成二二年夏、原田氏の外にも、当時文部省教科書局職員であつた芦澤節女史にもインタビューを申し込んだが、芦澤女史は、身体の具合が好ましくないこと、記録を一切取つておらず、誤つた思い込みで関係者に迷惑をかけたくないこと、担当が国語であり、漢文篇ではなかつたこと、の理由でインタビューを固く拒まれた。板ばさみに遭つた編集委員の苦衷に思いを馳せるべきであろう。

(補注) 筆者は近代の中等漢文教育史を教育思想、行政、教材の各レベルから捉えることを目標として、漢文教育存廢論、諮問委員会での動向を中心に行政レベルを、忠、孝、国家神道などの国体論を中心に教材レベルを調査研究している。

(神奈川県立神奈川工業高等学校／早稲田大学大学院教育学研究科在